

吃音の「思い出」

吃音とは広辞苑によれば、「発音障害の一種。発音の際、第1音が容易に出ない、繰り返す、引き伸ばすなど円滑に話せない状態」である。「原因は諸説あるが、不安・緊張などの心理的な要素が強く、男子に多い。」

こうして吃音についてレポートに書くのも、私が吃音、一般に「どもり」であったからだ。いつから「どもり」になったのか、はっきりと覚えていないが、中学の頃までは大きな悩みの一つであった。とくに第1音が容易に出ないなど、円滑に話せない状態が長くつづいた。

小学校の頃だと思うが、「あきちゃん」と遊ぶと「どもり」がうつると近所のおばさんが言っていたのを聞いて、押入れのなかで泣いたことを記憶している。また、友達から「どもり」の真似をされ、からかわれるのが、いやであった。学校の授業で一番いやだったのは、国語の時間である。教科書を順番に読んでいくのがあり、順番が回ってくる頃になると、心臓がドキドキして、逃げ出したくなる。早く終了ベルが鳴ることに一縷の望みを託したりした。緊張が極度に高まっており、第1音がなかなか出ず、先生から「注意」されたことも多かった。

こんな「どもり」に悩まされながらも、小さいときから人を笑わせることが好きだった。これが今でも寒い「ダジャレ」につながっているのであろうか。教室で友だちと掛けあい漫才のようなことをしたり、落語めいたことを披露したこともあった。教科書を読むのとは違って、自分で適当にアレンジして喋れるので、どもらずに「演技」ができたかもしれない。それと歳をとるにつれて、第1音を出すために「調子」をつけたりする「技」を身につけた。こんな経験をつむなかで、大学に入った頃には「どもり」を気にすることも少なくなった。

「どもり」に悩まされた私が大学の教師になるとは夢にも思わなかった。鉄道員になっていたかもしれず、人生とは「偶然」や「運」に左右されるものだ。教師になって25年、4分の1世紀が経つことになる。話すときに緊張する癖は今でもつづいており、教壇に立つと最初はやはり緊張感につつまれる。でも話し始めると、いつもの「調子」が出てくる。「どもり」に悩まされた経験を生かして、これからも仕事に精を出して生きたい。

(3日2日記)